

表 23

☆問 30 下にあげる行動や態度について、あなた自身はどれくらい当てはまりますか？ (n=390)

質問番号		平均値	SD	あてはまる・大いにあてはまる(%)
問 30_1	風俗店を選ぶ時、生の(コンドームを使わない)サービスがあるかどうかを確認する	2.3	1.2	17.9
問 30_2	できれば接客女性が日本人である風俗店を選びたい	3.9	1.1	68.8
問 30_3	生サービスをしてくれない接客女性は指名しない	2.4	1.2	14.3
問 30_4	接客女性がコンドームを使ってくれといえ、それに応じる	4.3	0.9	87.2
問 30_5	接客女性に生の(コンドームを使わない)サービスを依頼したことがある	2.4	1.4	26.8
問 30_6	接客女性が「生でもいいよ」と言ったら、コンドームは使わない	3.1	1.4	46.9
問 30_7	風俗店が「うちの店では 100%コンドーム使用」というなら、それに従う	4.3	1.0	86.8
問 30_8	接客女性の健康管理は、風俗店の経営者(雇用主)の責任だ	4.0	1.1	71.8
問 30_9	接客女性と気まずい思いをしてまで、生の(コンドームを使わない)サービスにこだわらない	4.0	1.2	77.4
問 30_10	風俗店が「100%コンドーム使用」というのは、当然だと思う	3.9	1.1	65.5
問 30_11	接客女性がエイズ検査で陰性結果が出ているなら、コンドームは使わなくても大丈夫だと思う	2.3	1.2	15.8
問 30_12	安全な接客女性から生のサービスを受けられるなら、それなりの金額を払ってもよい	2.9	1.2	36.4
問 30_13	店の方針だから、と言われれば、コンドーム使用に応じるしかないと思う	4.2	1.0	84.7
問 30_14	客のニーズがあるのだから、生のサービスを売り物にする店があっても当たり前	3.0	1.2	34.5
問 30_15	店とのトラブルがわずらわしいので接客女性から頼まれればコンドームを使用する	3.9	1.1	75.1
問 30_16	衛生面からも、店はコンドームの使用を徹底してほしい	3.7	1.0	58.9
問 30_17	接客女性は定期的に性病検査やエイズ検査を受けておくべきだと思う	4.7	0.6	96.9
問 30_18	避妊は接客女性が自分で責任をもつべきだと思う	3.7	1.2	58.3

表 24

問 32 以下の項目にある意見は、あなた自身にどれくらい当てはまりますか？ 風俗でのセックス、  
風俗以外でのセックスに関係なく、お答えください。

(n=390)

質問番号		平均値	SD	あてはまる・大いにあてはまる(%)
問 32_1	相手がコンドームを使おうとしないときには、 自分から使用を提案する	3.2	1.2	15.2
問 32_2	「コンドームをつけなくても大丈夫だよ」という 相手の言葉に、安易に説得されない	3.4	1.2	19.1
問 32_3	相手に「使いたくない」と言われても、コンドーム を使うよう、もう一回頼んでみる	3.1	1.2	14.7
問 32_4	相手への愛情の深さ・浅さに関係なく、セックス するときは必ずコンドームは使う	3.1	1.2	16.5
問 32_5	相手が自分への愛情を訴えても、コンドーム なしのセックスには応じない	2.8	1.2	11.4
問 32_6	「安全日」にもきちんとコンドームを使用する	2.9	1.3	15.3
問 32_7	相手がうまくコンドームを装着できないような 場合には、性器の挿入あるいはセックスその ものをあきらめる	2.5	1.1	7.2
問 32_8	コンドームが手もとにないと気づいたとき、コ ンドームが手に入るまで、いったんセックスを 中断する	2.7	1.2	10.3
問 32_9	コンドームの使用感が気になるときでも、コン ドームを使いつづける	3.1	1.2	13.2
問 32_10	お酒で酔っ払ったときには、なるべくセックス まで進まないようにする	2.8	1.2	12.2
問 32_11	相手がコンドームを使いたがらない時には、 性器の挿入をとまなわないセックスを楽しむ	2.8	1.1	7.8
問 32_12	セックスのとき、「1回くらいコンドームなしでも 大丈夫」という楽観的な気持ちを追い払う	3.1	1.2	12.4
問 32_13	セックスにどんなに夢中になっても、コン ドームのことを忘れない	3.0	1.2	13.9

表 25

問 33 あなたは、つぎのような情報にどの程度興味関心がありますか。

(n=390)

質問番号		平均値	SD	あてはまる・大いにあてはまる (%)
問 33_1	エイズや性感染症の症状や治療についてのかなり詳しい情報	3.8	0.9	17.8
問 33_2	エイズや性感染症の流行状況についての詳しい情報	3.8	0.8	18.9
問 33_3	男性機能や包茎、性器の形状についての情報	3.2	1.0	10.6
問 33_4	バイアグラ、強壮剤、催淫剤、ラブドラッグの効果や安全性	3.4	1.2	16.0
問 33_5	風俗での安全な遊び方、風俗で遊ぶときのマナー、店や接客女性との交渉術	3.7	1.0	20.2
問 33_6	セックステクニック、女性の性感を上げる方法	3.9	0.9	26.1
問 33_7	肌やひげの手入れ、メンズエステ、美顔、ひげや体毛の脱毛など男性美容	2.9	1.1	6.2
問 33_8	うつや睡眠障害についての情報	3.0	1.1	11.1
問 33_9	泌尿器系の病気や前立腺がんなど男性がかかりやすい病気の情報	3.7	0.9	17.3
問 33_10	生活習慣病やメタボリックシンドロームについての情報	3.7	1.0	19.6
問 33_11	禁煙法についての情報	2.4	1.3	6.7
問 33_12	節酒・アルコール依存症についての情報	2.6	1.2	5.2

表 26

問 34 あなたがよく利用する繁華街に、つぎのようなサービスがあったら利用すると思いますか。

(n=390)

	度数	パーセント
問 34_1 「男性の健康」についての医療職による出張相談スポット	106	27.2
問 34_2 夜間診療のある性病クリニック、性病検査所	116	29.7
問 34_3 風俗案内所や風俗店、ラブホテルに置いてある健康パンフレット	124	31.8
問 34_4 「健康についての講習」受講済み健康優良マークをもった店	128	32.8
問 34_5 風俗ライターや風俗嬢が行う「男性の健康」相談スポット	114	29.2
問 34_6 性病の自己検査キットが買える深夜営業の薬局	142	36.4
問 34_7 その他	19	4.9

表 27

問 2 週刊ポストに掲載されたアンケート調査結果についての記事「男たちの性と生」(2006年12月22日号掲載)はお読みにになりましたか？(○は一つ)

	度数	パーセント
はい	467	59.5
いいえ	69	8.8
覚えていない	246	31.3
無回答	3	0.4
合計	785	100.0

表 28

付問 2-1 記事について何か感想・コメントがありましたら、自由にお書きください。

	度数	パーセント
記述なし	509	64.8
記述あり	276	35.2
合計	785	100.0

表 29

問 40 当アンケートに引き続き、「東班」では、男性の性風俗利用経験をより詳しくおうかがいする第三次調査（電話インタビューあるいは面接調査）の実施を計画しております。この第三次調査にご関心のある方・ご協力いただける方には、別途、お願いと案内を郵送させていただきますが、ご協力いただけますでしょうか？

	度数	パーセント
① 電話調査なら協力してもよい	226	28.8
② 面接インタビューなら協力してもよい	40	5.1
③ どちらも協力できる	196	25.0
④ どちらも協力できない	307	39.1
無回答	16	2.1
合計	785	100.0

表 30

問 41

前回の『週刊ポスト』誌上での第一次調査の結果をご希望の方は、郵送いたします

	度数	パーセント
①一次調査結果の郵送を希望する	433	55.2
②一次調査結果の郵送を希望しない	338	43.1
無回答	14	1.8
合計	785	100.0

表 31

問 42

今回のアンケート調査(第二次調査)の結果をご希望の方は、郵送いたします。

	度数	パーセント
①二次調査結果の郵送を希望する	470	59.9
②二次調査結果の郵送を希望しない	299	38.1
無回答	16	2.1
合計	785	100.0

表 32

問 43

このアンケートについてのご意見がございましたら、ご自由にお書きください。

	度数	パーセント
記述なし	402	51.2
記述あり	383	48.8
合計	785	100.0

## SW への半構造化面接のための文献研究

澁谷 知美 (東京経済大学 専任講師)

### 1. 研究目的

性娯楽施設・産業従業者 (SW) への半構造化面接を実施するに先立ち、SW の社会的地位のヴァルネラビリティ (脆弱性) に配慮しながら、いかにして調査を行うべきかを先行研究から明らかにする。

### 2. 研究方法

文献による調査。聞き取り調査を含む SW についてのフィールド・ワークの文献と対象とした。また、SW には女性が多いことをふまえ女性の声を聞き取ることに関心を持ってきたフェミニスト・エスノグラフィの文献も参照した。

(倫理面への配慮)

文献研究のため特になし。

### 3. 研究結果と考察

SW への調査やフェミニスト・エスノグラフィーではどのような調査上の問題点やその解決法が示されているだろうか。

SW にまつわるフィールド・ワークでは「参加型行動調査 (participatory action research)」が取られているケースが見られる。参加型行動調査とは、ある社会問題解決のための運動や活動などに研究者が参加し、当事者と活動を共にする中でデータ収集と記述を行うタイプの調査である。結果についてはフィードバックが行われ、インフォーマントの意見が反映されるケースが多い。というのも、被調査者が「共同者」としてその視点を成果物に反映させることで、調査結果のドグマ性を低めることに貢献すると考えられているからである。

ただし、この調査法にも問題がないわけではない。英国でセックスワーカーと同じコミュニティに住居し活動を共にしながら参加型行動調査を行ったオニールによれば、調査者とインフォーマントが接近するこのタイプの調査には、とくに SW のように社会的に排除された人びとをインフォーマントとする場合、よりいっそうのリスクとジレンマがつきまとう。調査者が感情的にインフォーマントに寄り添うがゆえにかえって調査が進まなくなる場合が、

その例である。データを取るためにフィールドに入っては、自分の大学や研究所に戻ってデータをまとめ、報告書を執筆する研究者は、「研究者というよりもまるで [インフォーマントから情報を搾取する、引用者] ポン引きのようである」。そうした二重生活に研究者が耐えられない可能性がある。かようなジレンマにたいする確たる処方箋は無い。ただ、知の構築にあたって必要な倫理的/政治的な配慮を怠らないこと、ワーカーたちと分かち合った活動について彼女たちの意見を取り入れつつ確認し、説明するよう努力することはできるとオニールは述べる (O'Neil, 2001, *Prostitution & Feminism: towards a Politics of Feeling*, Polity: 50)。

やはり参加型行動調査によって人身売買経験者や移住経験者を含むタイ人ワーカーを調査した青山は、データ解釈上の困難とその解決法についてインフォーマントの「嘘」を事例として説明している。インフォーマントから「ほんとうのこと」になるべく近い情報を得るにはどうしたらいいか、という問いをたて、インフォーマントの聞き取りの場面以外の生活や態度を知る参与観察に有効性を見出している。さらに当該の社会問題にインフォーマントと取りくむ機会があれば、それも好機としている。相手の視点に近い所から問題が見えるのに加え、他の関係者と知り合いになることができればより多角的に問題を見ることができるからだ。こうした多様な人間関係に身を置きながら「聞き取り相手に「嘘」をつかれたことが分かったりしたらしめたもの」と青山は言う。なぜなら、インフォーマントが「嘘」をついたほうが良いと判断した事情を含む複合的な事態のある一側面を見たことを意味し、その後、同じ問題を、違う人の視点から、または同一人物の違うときの視点から、あるいは調査者独自の視点から検討することができるからである (青山薫 2007『「セックス・ワーカー」とは誰か： 移住・性労働・人身取引の構造と経験』大月書店、22)。

欧米から南米にセックス観光にやってくる客を調査したオコンネルも、参加型行動調査の中に研究対象の中心となるインフォーマントへの聞き取りだけでなく、インフォーマントを取り囲む人びとへの聞き取りも取り入れてい

る。彼女は SW やボン引きや売春宿の支配人や受付スタッフにも聞き取りを試み、文化人類学者ギアツのいう「分厚い記述」を目指している。多様な立場の人びとに話を聞くことは、事実の確からしさを高めていくことに役立つだけでなく、調査が複数の調査員によって進められる場合に調査者間の経験の違いを比較することにも役立つ。併せて、彼女は新聞や雑誌記事やポルノグラフィやインターネットやメールを用いたインタビューなど多様なリソースからの情報収集も行っている (O'Connell Davidson, 1998, *Prostitution, Power and Freedom*, Polity Press: 7)。複数の調査者に尋ねることのみならず、複数の調査法を組みあわせることも、事象を多角的な視点から把握するために重要である。

上記の論者たちも依拠するフェミニスト・エスノグラフィの分野においては、調査の手法やデータの解釈をめぐる次のような論点が提出されている。第一に、調査者とインフォーマントが女性である場合に見えなくなりがちなことだが、調査者とインフォーマントは当該社会における社会的立場の違いのみならず、書き手と書かれ手のという点において大きな違いがあるということである (Abu-Lugho, 1993, "Can There be a Feminist Ethnography?" *Women and Performance*, 5: 5)。

第二に、立場の弱い女性がインフォーマントになる場合、調査者はつい彼女を非力な存在として描いてしまいがちだが、そのことに自覚的になることである。モハンティは西洋の研究者が非西洋の女性を「無知で、貧しく、伝統に縛られ、自らの権利を知らず、家庭的で、虐げられている」といったような偏向した表象を行うことを批判している (Mohanty, 1984, "Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses," *Boundary*, 2:337)。

いずれの問題点についても、オニールが実践するような、研究者が絶えず自己の調査のありように注意を払うことのほかに決定的な解決法は無いように思われる。ただし、仏教における女性の地位向上のための運動をしながら参加型行動調査を行う川橋に倣い、エスノグラフィを書くことの最終的なゴールを (調査者自身も含めた) 女性たちの状況を改善することに置くことは、一つの指針となるだろう (川橋範子 1997「フェミニストエスノグラフィの限界と可能性: 女による女についての女のための民族誌?」『宗教と社会』1997年別冊号、54-55頁)。

#### 4. 考察

「6.」に「考察と結論」として併記。

#### 5. 自己評価

##### 1) 達成度について

当該テーマに関しては、必要最低限の情報は収集できたと認識している。ただし、もう少し多くの文献に当たる必要も感じている。

##### 2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

SW へのインタビュー調査やエスノグラフィに焦点化してなされた文献研究は日本語圏においてはあまり見られない。その空隙を埋めるだけの意義はあったと思われる。

##### 3) 今後の展望について

同一テーマのもと、渉猟すべき資料の数をもう少し増やしたいと考えている。

#### 6. 考察と結論

社会地位的にヴァルネラブルな SW への半構造化面接を行うに際して配慮すべき点を、面接調査の実施段階、調査結果の解釈段階に分けてまとめれば以下ようになる。

調査の実施段階では、①許される範囲内でインフォーマントと活動をともにし、多角的な視点をとるよう努めること。②社会的立場の相違のみならず、書き手と書かれ手の立場の違いに意識的になること、が挙げられる。

調査の解釈段階では、①語られたことを、別の立場にある人の視点や、同一人物の別の時の発言などから、多角的に検証すること。②参与観察や面接調査以外にも、印刷物やインターネットなど多様なリソースからの情報集取を行い、調査結果との比較を行うこと。③まとめたデータはいったん当事者にフィードバックし、その見解を反映した上で最終的な結果とすること。④相対的に立場の強い調査者はインフォーマントを非力な存在として表象しがちだということに自覚的になること、が挙げられる。

#### 7. 知的所有権の出願・取得状況 (予定を含む)

なし

## B. 性娯楽施設・産業従業者 (SW) の保健行動の阻害要因に関する研究

### SW10名への半構造化面接調査 (中間報告)

東 優子 (大阪府立大学人間社会学部 准教授)

鍵田いずみ (MASH 大阪)・張由紀夫 (Rainbow Ring/エイズ予防財団)・松沢呉一 (ライター)

#### 1. 研究目的

性娯楽施設・産業従業者 (SW) の HIV/AIDS を含む性感染症への感染の脆弱性、予防の阻害要因および健康教育ニーズを評価する。

#### 2. 研究方法

独立した調査者 3 名による半構造化面接。面接回数は 1 人につき 1 回、インタビューに要した時間は 1 回約 1 時間。なお、質問項目は以下の通りであった。

- 現在の仕事とこれまでの職歴
- 年齢
- したりしなかつたりしたこと
- できたりできなかつたりすること
- 仕事上とプライベートな関係では、コンドーム使用状況や使用することへの態度に違いがあるか?
- 日本人のセックスワーカーのセクシュアルヘルスを保障していくための取り組みについて思うこと

(倫理面への配慮) 調査にあたり、大阪府立大学人間社会学部の研究倫理委員会の承認を受けた。質問紙調査やインタビューでは、つねにプライバシーについて配慮し、研究の目的、データの保管や利用について明確にし、自発的な協力を承諾した対象にのみ参加してもらった (文書末の

「インタビューに協力してくださる方への説明書」および「同意書」参照のこと)。成果発表では、研究協力者が同意されかねないような情報は改変したり、非公表扱いとする。回答・インタビュー記録は研究目的以外に使用しない。研究に係る全員について、補助作業において知りえた情報を口外しないよう指導を徹底している。

#### 3. 研究結果と考察

面接調査の対象となった 10 名の内訳は (性別\*性的指向) 女性異性愛者 4 名、男性同性愛者 3 名、男性異性愛者 2 名、女性両性愛者 1 名であり、現在の業種その他については、以下の表にある通りであった。

データ分析は未了であり、現時点での結果および考察は避けたいが、SW の HIV/AIDS を含む性感染症への感染予防の阻害要因として、先行文献等で指摘されてきた「所属先の経営方針」「顧客の意向としての<ナマ志向>」以上に、「経営者・マネージャーの指導の欠如」「仲間との情報交換の欠如」「(仕事上必要と思われる) 基本知識の欠如」「諸刃の剣となりうる仕事モード/仕事へのプライド」といった、より詳細な阻害要因が示唆されることが予測され、分析結果を SW への具体的な予防介入手法への提言につなげてゆきたい。

	性別 (年齢)	仕事を始めた年齢	業種	地域
A	女性 (30代)	20代前半	ピンサロ→個人売春/デリヘル	京都/大阪
B	女性 (25歳)	21歳	エステ/ヘルス→SW以外	東京
C	女性 (29歳)	20歳	援助交際→ホテル/ヘルス/愛人クラブ/AV→水商売	東京/埼玉
D	女性 (28歳)	20歳	AV/ヘルス→SM/ストリップ	関東
E	女性 (31歳)	18歳	キャバクラ→ヘルス→ソープ	東京
F	男性 (30代)	—	ゲイ相手の出張ホスト	東京
G	男性 (30代)	(4年前)	ゲイ相手のビデオ制作・出演	東京
H	男性 (20代)	(2年前)	元・男性相手のウリ専ボーイ	東京
I	男性 (30代)	27歳	男性相手のウリ専ボーイ/AV	大阪
J	男性 (20代)	26歳	AV/デートクラブのホスト	大阪

## インタビューに協力してくださる方への説明書

## 1. ごあいさつと研究の目的

はじめまして。私たちは厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」を行う、研究班（主任研究者 東優子/大阪府立大学人間社会学部准教授）です。「日本の性娯楽施設・産業に係る人々のセクシュアル・ヘルス（性の健康）を促進するため、多様な「しかけ」づくりの検討と開発、さらには実践していくことを目的とする研究活動を行っています。

本日、インタビューさせていただきますテーマは、「日本人セックスワーカーの私にとってのHIV（エイズ）や性感染症予防～したりしなかったり、できたりできなかつたりすること～」です。あなた自身がこういった経験や考えをお持ちかを教えていただけますでしょうか？

## 2. この研究への協力方法について

## (1) インタビューへの参加について

今回、日本語を母国語とし、セックスワークをお仕事とする方に個別のインタビューをお願いしています。時間は（研究の説明などの手続きを含めて）約1時間の予定です。インタビューは録音テープに記録させていただきます。インタビューの後、その内容を文書に書き起こして分析を行いたいのですが、書きとりには限界があり、せっかくお話しいただいた内容が不正確にしか再現できなくなる可能性があるためです。

インタビューの中では個人情報保護のために、お名前やお仕事先など、個人を特定する情報は一切用いません。録音テープは、研究責任者である東優子（大阪府立大学人間社会学部准教授）が施錠できる保管庫に保存し、研究が終了しましたら責任をもって処分いたします。

## (2) 説明と同意について

この説明書をお読みいただいた後、研究にご協力をいただけます場合は、別紙の同意書（2通）に署名をいただけますでしょうか？同意書は、あなたと研究責任者が1通ずつ保管することになります。あなたがもし同意されなくても、一切の不利益は生じません。また、同意した後でも、報告書等の発表前に記述した内容をご確認いただき、その際に同意を撤回していただくことも可能です。

## (3) プライバシーの保護

今回協力いただくインタビューの結果は、平成19年度研究成果報告書、平成19年度エイズ対策研究推進事業研究成果発表会（1月22日～2月3日開催予定）、あるいは学会雑誌に発表されることがありますが、あなたやあなたの話に登場する個人のプライバシーには十分に配慮することをお約束いたします。

## (4) ご質問、お問い合わせ

この研究についてご質問などございましたら、いつでも研究責任者にお問い合わせください。（東優子 TEL 090-7486-6981 E-mail higashi@sw.osakafu-u.ac.jp）

以上の内容をよくお読みいただき、ご理解いただいた上で、この研究に協力していただける場合は、別紙の同意書に署名または記名し、日付を記入して、インタビューアールにお渡しください。



# 同意書

私は、「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」の一環としておこなわれる、インタビューの実施に際して、同研究およびインタビューに関する説明を別紙説明書によりインタビュアーから受け、下記の点を確認したうえで、参加することに同意します。

1. 研究の目的・方法
2. インタビューの方法・内容
3. 本研究への協力について、同意をしなくても不利益をこうむらないこと
4. プライバシーが最大限に尊重されること

研究協力者氏名 \_\_\_\_\_

同意日 平成 年 月 日

本研究の説明をしたインタビュアー

所属 \_\_\_\_\_

氏名 \_\_\_\_\_

ご本人の希望により、インタビュー結果を公表する前に、インタビュアーが再度連絡をとり、ご本人が登場する箇所の記述について確認したいという場合は、こちらに氏名・連絡先をお書きください。

氏名 \_\_\_\_\_

連絡先 \_\_\_\_\_

本同意書は、本人と研究責任者である東優子（大阪府立大学）が一部ずつ保管する。

## 青年期女性における金銭が介在する性行動とセクシュアルヘルスの問題 —携帯電話の web アンケートを用いた調査から—

野坂 祐子 (大阪教育大学 講師)・内海 千種 (エイズ予防財団 リサーチレジデント)

東 優子 (大阪府立大学 准教授)・徐 淑子 (新潟県立看護大学 講師)・渋井 哲也 (ライター)

### 研究要旨

本研究では、携帯電話 web アンケートにより、18歳から29歳の女性2,264名(平均年齢22.7±2.78歳)から、金銭が介在する性行動と金銭の授受を伴わない性行動の両方の状況下における保健行動の実態を把握した。

対象者の11.8%が性娯楽施設に勤務する以外の状況において、「セックスをしてお金を受け取った」経験があり、挿入行為以外を含む何らかの性行為によって金銭を受け取った経験をもつ者は14.2%であった。相手と知り合う手段としてもっとも多かったものは、「出会い系サイト」の利用であり、事前に「セックスの時にコンドームを使うこと」を確認した者は48.6%いた。しかし、実際には、性行為の際に不快な経験をもった者が77.3%おり、「コンドームを使わないセックスをした」者も2割程度存在した。しかしながら、金銭の授受のない性行為においても、回答者のうち83.7%が不快体験を経験しており、なかでも「妊娠したかもしれないと、心配したこと」の経験がもっとも多かった。金銭の授受のない性行為においては、「コンドームを使わないセックス」の割合も高く、セクシュアルヘルスの問題が示された。

HIVやSTDに関する知識は、一般人を対象とした先行研究と比べて正答率が高く、個人が有する情報量は少なくないと考えられるが、自由記述ではSTDやセックスについて具体的な情報を求める声が多く寄せられた。本調査では、アンケートで質問したHIV・STDに関する知識について、対象者が回答後に正答を確認できるよう閲覧用のwebサイトを設定し、教育・予防啓発の一助とした。

金銭の授受の有無や相手との関係性などによる違いはあるものの、いずれの場合も女性にとってはセクシュアルヘルスのリスクが存在し、今後、さまざまな状況の違いに応じた課題を明らかにし、有効な支援・予防啓発につなげていくことが必要である。

### 1. 研究目的

従来、女性の性行動についての調査研究は、恋人や特定のパートナーといったステディな相手との性行動を前提としたものが多く、親密であり、ある程度、継続的な関係性における性行動やHIV予防行動の特徴が示されてきた。また、近年、金銭の授受を目的とした関係性における性行動として、性娯楽施設・産業に係わる女性(以下、commercial sex worker: CSWとする)の意識や性行動に注目した調査研究も実施されており(池上・要他, 2000・2005; 要・水島, 2005など)、CSW当事者への予防啓発のみならず、当事者からの情報発信も盛んに行われている。金銭の授受を伴う性行動という観点で見れば、前

者はいわゆる“素人”の一般女性を対象としたものであり、後者は“玄人(プロフェッショナル)”であるCSW女性として位置づけられよう。しかし、前年度に行った本プロジェクトの文献調査から、①1980年代半ばに流行したテレフォンクラブ(テレクラ)や伝言ダイヤル、1990年代のインターネットや携帯電話の普及に伴い、いわゆる“素人”の女性が金銭や高価な品物をもたらすことを目的にセックスをする現象が報告されるようになった、②「アマチュアのセックスワーカー」を自認する女性が存在することが示された。つまり、金銭が介在する性行動は必ずしもCSWだけの行動ではなく、かつ、金銭が介在する性行動は(本来、プロによるサービスである)セックスワークと

しては認識されていないという、二つの文脈での「ボーダレス化」が生じていることが推測される。

この「素人—玄人のボーダレス化」を示す一例としては、1990年代後半の「援助交際」と呼ばれた性行動がある。おもに高校生女子や若年層女性の行動として注目された援助交際は、金銭と引き換えに行うデート行動や性行動を指し、高校生女子を対象とした調査では、「金銭と引き換えに性交をすること」の経験者が2.3%（福富ら，1998）～4.4%（深谷ら，1998）であることが報告されている。援助交際の経験は、学校の学力差や地域差が関連するとの指摘もあり、7.9%の女子が援助交際の経験を有する学校もみられた（深谷ら，1998）。このように、“一般女子・女性”のなかでも、金銭が介在する性行動の経験は決して稀なものとはいえ、性行動の一つのありようとして存在する。しかしながら、こうした女性の性行動については、保健行動の観点からは十分に注目されてこなかった。

そこで、本研究では、性娯楽施設・産業での勤務と同じく金銭が介在する性行動をとりながら、産業形態に従事することなく個人的に性行為によって金銭を得るという状況に着目し、こうした状況下における女性の性行動の詳細を把握し、HIVやSTDの感染リスクを含めたセクシュアルヘルス（性の健康）の問題を検討することを目的とする。

性行動が活発であり、エイズ対策の個別施策層としても位置づけられている若年層を対象とし、18歳から29歳の青年期女性を本研究の対象者とする。また、携帯電話のwebを通じた調査手法を採用し、携帯電話やweb上の各種サービスにアクセシビリティの高い層を意図的に調査対象者として限定することで、携帯電話利用者の行動の特徴をみることができると考える。

性行動におけるセクシュアルヘルスの問題とは、性感染症や妊娠を予防するための適切なコンドーム使用や、セックスや性の健康に関する情報へのアクセシビリティ、さらに、性行為の際に受ける可能性のあるさまざまな暴力被害や苦痛などを指す。女性にとって、金銭が介在する性行動と金銭の授受を伴わない性行動のそれぞれにおいて、セクシュアルヘルスを維持・向上するうえでの何らかの困難な状況があるとすれば、その改善に向けた具体的な施策を提言していくことをめざす。

なお、性行動に対して得られる何らかの経済的報酬とし

ては、金銭のほかに、高価な品物の贈与、食事やデート代、旅行代などの支払いもあるが、これらは金品の受領を直接的な目的としないデート行動でもしばしば行われることであるため、本調査では「金銭の授受」のみを取り上げる。

本調査の特徴としては、次の5点が挙げられる。

1) 従来の若年層を対象とした性行動調査の多くは、高等学校や専門学校、大学などの教育機関に在籍する生徒や学生を対象とし、所属機関を通して実施されたものがほとんどであるため、学校に通っていない、もしくは卒業・修了後の若者についての性行動の実態は十分に明らかにはされていない。本調査では、携帯電話を通じた調査会社への登録者を対象とするため、現役学生以外の青年を広くターゲットにすることができる。

2) 近年、とりわけ若年層においては、携帯電話などのモバイルツールを活用した「出会い」の機会を利用したり、webサイトを通じて金銭が介在する性行動が行われたりする現状が指摘されていることから、本研究では携帯電話のweb上の各種サービスにアクセシビリティの高い層を意図的に調査対象者として限定する。

3) 従来の性行動調査においては、いわゆるステディな関係性における性行動を前提とした質問調査が多く、そのほかとしては「援助交際」の経験を問う調査が若干数、実施されているのみである。「性産業従事者」を対象とした調査では、店舗勤務者のみを対象にしているため、本調査で取り上げるような「店舗勤務以外での金銭の授受をともなう性行動」については、これまで実態は不明であった。金銭の授受をともなう性行動が、青年期女子のなかでどれくらい行われているかを把握し、出会い系サイト等を通じた新しい出会い方や交際・通信範囲の変化にともなう現状を把握することを目指す。

4) セクシュアルヘルス（性の健康）を、HIV/STD予防の側面だけで捉えるのではなく、広く「安全ではない性行動」として捉えることで、性行動におけるさまざまな健康被害や暴力被害の実態を明らかにする。

5) 本調査の対象者には、協力者として調査に参加してもらうだけでなく、回答後にHIV/AIDSに関する情報提供を行うサイトを閲覧することができるようプログラムを設定し、対象者である青年期女子への教育・啓発活動の一環となることをめざした。

## 2. 研究方法

### 1) 調査方法

携帯電話を用いたアンケート配信サービスによる web アンケートを実施した。アンケート調査会社の選定においては、複数の調査会社の担当者と面接・ヒアリングを実施し、本研究の趣旨についての理解が得られた会社のうち、①調査手段として携帯電話の web を利用できること、②会社への登録者に若年層が多く、とくに 18 歳～29 歳の女性の登録者数が研究計画の規模に見合うこと、の 2 点を検討し、両条件にあった株式会社ポイントオンへ実施の委託を行った。

同社にモニター登録している 18 歳から 29 歳までの女性に対し、2007 年 12 月 7 日から同年 12 月 11 日までの 5 日間、携帯電話の web 上でスクリーニング調査を行った。スクリーニング調査では、本調査の趣旨と個人情報の守秘について明記し、同意を得られた者にのみ性交体験の有無を問うた。性交経験がある者に対し、再度、本調査に関するアナウンスを行い、協力を承諾した者を本調査対象者とした。

スクリーニングの結果、18・19 歳 353 名、20・24 歳 1,757 名、25・29 歳 2,169 名の合計 4,279 名から、本調査への協力についての同意が得られた。

本研究では、対象者数を 2,000 名程度の規模とすることを計画したため、配信数の約 8 割の回答が得られると仮定し、同意が得られた 4,279 名のうち 2,600 名に web 上に設置した本調査ページの URL を通知した。その際、できるだけ若年者層を対象とするため、本調査承諾者のうち 25 歳未満の者へは全員に通知を行い、残りの対象者は 25・29 歳の中からランダムに抽出し、配信した。

本調査は 2007 年 12 月 14 日に調査項目を配信し、同年 12 月 25 日までの 12 日間、回答を受け付けた。

なお、本調査の名称は、アンケート配信会社と協議のうえ、「女性のライフスタイルに関するアンケート」とした。

また、本調査の回答者には、調査インセンティブとして、登録調査会社系列のサイトで使用できる 500 円分のポイントを渡した。

### 2) 調査内容

本調査は、調査協力についての再確認を行ったうえで、20 項目の質問項目（選択肢による回答）と、調査の感想等についての自由記述欄からなる構成とした。質問項目の内容は以下のとおりである。

- ・年齢、職業、学歴、居住地（都道府県）
- ・日常生活におけるセクシュアルヘルスと健康全般等に対する意識や態度
- ・性娯楽産業等で勤務した経験
- ・金銭の授受を介した性行為の経験の有無
- ・金銭の授受を介した性行為の相手と知り合う手段
- ・金銭の授受を介した性行為における事前の確認事項
- ・金銭の授受を介した性行為時のリスク行動や不快な経験
- ・金銭の授受のない性行為の経験の有無
- ・金銭の授受のない性行為時のリスク行動や不快な経験
- ・HIV 抗体検査、STD 検査の受検経験
- ・STD 感染への対処行動
- ・HIV や STD に関する知識

なお、本調査では性行為を指す言葉として「セックス」を用い、「男性器の挿入を伴う性行動」と説明を付記した。（本来、セックスはより広い性行為を含む概念であるが、アンケート会社との協議で、一般的な回答のしやすさを考慮したほか、HIV 感染リスクの高い性行為として男性器の挿入をとりあげることにした。）

また、HIV や STD についての知識を問う質問項目への回答後には、調査終了時に web 上で閲覧できる解答と解説のページを設定した。

#### （倫理面への配慮）

本研究は、大阪府立大学人間社会学部（主任研究者所属）の研究倫理委員会の審査を受け、承認された。

また、研究遂行上の倫理面への配慮として以下のような配慮を行った。

1. アンケート調査会社との間で、会社側が保有している対象者に関する個人情報と、本調査において対象者が回答したデータとを照合させない旨の覚え書きを取り交わした。
2. 本調査の対象者選定のために実施したスクリーニング調査において、本研究の目的とデータ使用についての研究班の方針を明示し、インフォームドコンセントを得たうえ

で調査を実施した。

3. 対象者が本調査に協力するにあたり、途中での中断が可能であることを明記し、研究目的および研究班の方針についての理解と了承のもと、自由意志に基づいて参加できることを保証した。

4. 質問は多肢選択式とし、調査協力者が答えやすいよう工夫した。また、回答はすべて数値化され、統計的に処理を行ったため、個人情報の扱いにおける問題は生じない。

5. 調査結果は、研究班において厳重に保管し、第三者がデータにアクセスできないよう制限を徹底した。また、アンケート調査会社が回収したデータは、本研究班への納品後、すみやかに削除することを契約した。

### 3. 研究結果

主たる調査結果は、以下のとおりである。

#### 1) スクリーニング結果概要

本調査の実施に先立ち行ったスクリーニング調査では、本調査の趣旨を明記した調査協力依頼に対し、7,030件の回答が得られ、うち98.7%にあたる6,941名が「協力可」であった。このうち男性を除くと女性は6,833名であった。

本調査の対象年齢である18歳から29歳に該当しない女性を除くと、「18歳-19歳」が967名、「20-24歳」が2,891名、「25-29歳」が2,889名であった。

6,747名のうち何らかの原因で通信が中断された93名を除く6,654名のうち、「性経験（セックスの経験）」がある者が4,899名（73.6%）であり、ない者が1,755名（26.4%）であった。

本調査である「性行動や性行動によって感染する病気の予防に関するアンケート」への協力を承諾した者は、4,279名（87.3%）であった。このうち、2,600名にweb上に設置した本調査ページのURLを通知した。その際、できるだけ若年者層を対象とするため、本調査承諾者のうち25歳未満の者へは全員に通知を行い、残りの対象者は25-29歳の中からランダムに抽出した（詳細は上記、調査方法の項参照）。

#### 2) 本調査結果：対象者の属性

本調査に参加・協力した者は、2,264名であった（配信数からの参加率：87.1%）。

「年齢」の平均は22.7±2.78歳であった。

「現在の職業・立場」として、多かったものから順に、「学生」（25.4%）、「アルバイト・パート」（21.5%）、「主婦（家事専業）」（20.0%）、「常勤職員」（14.6%）、「契約・派遣社員」（8.4%）、「無職」（4.4%）、「家事手伝い」（3.4%）、「その他」（2.3%）であった。

「学歴」として、もっとも多かったのが「高等学校卒業」で28.5%であった。ついで、「高専・短大・専門学校卒業」が17.6%であった。「大学 在学」は15.1%であり、「大学 在学/中退/卒業」と「大学院 在学/中退・修了」を合わせた大学進学者全体の割合は26.1%であった。また、調査時に「高等学校 在学」の者は3.8%であった。

「居住地域」は、全国から回答が寄せられていたが、割合が高かった地域は順に、「東京都」（11.7%）、「北海道」（7.4%）、「大阪府」（7.3%）、「神奈川県」（6.2%）であった。

#### 3) 日常生活におけるセクシュアルヘルスと健康全般等に対する意識や態度

対象者のセクシュアルヘルスと健康全般等に対する意識や態度を訊ねたところ、半数以上の者が実施していると答えた項目は、「たばこを吸わない・禁煙をこころみる」（62.9%）、「生理のあった日(周期)を記録する」（59.8%）、「酒を飲まない、あるいは飲み過ぎない」（57.3%）、「美容やコスメ（化粧）についての情報を探す・調べる」（52.2%）であった。

また、HIVやSTD予防行動に関する項目については、「おりもの（膣分泌液）の色やにおいを気にかけて見る・チェックする」（32.6%）、「セックスについての情報を探す・調べる」（28.1%）、「自分でコンドームを買う」（17.8%）、「ポーチやバッグにコンドームを常備する」（10.3%）であった。

#### 4) 性娯楽産業等で勤務した経験

これまでに性娯楽産業等で勤務した経験については、「クラブやバーのコンパニオン」の勤務経験者が19.2%、「ピンサロやファッションヘルスなど、セックスはしない性風俗店」での勤務経験者が6.6%、「デリヘル」勤務経験者が6.8%、「ソープランドなど、店内でセックスをする性

風俗店」での勤務経験者が1.6%であった。

上記経験者 575 名のうち、調査時点でも勤務をしていた者は、「クラブやバーのコンパニオン」86名(15%)、「ピンサロやファッションヘルスなど、セックスはしない性風俗店」29名(5%)、「デリヘル」20名(3.5%)、「ソープランド」など4名(0.7%)であった。

#### 5) 金銭の授受を介した性行為の経験

これまでに性娯楽産業等での勤務以外の状況で、金銭を受け取ることを目的に男性と何らかの性行為をしたかどうかを訊ねた。その経験率ともっとも最近、金銭の授受を紹介するセックスをした時期、相手と知り合った手段、受け取った金額、事前の確認事項、セクシュアルヘルスに関する不快な経験の有無についての回答結果は以下のとおりであった。

##### ①金銭の授受を介した性行為の経験

男性からの金銭授受については、「性的なことはしなかったが、男性との食事やカラオケなどにつきあい、お金を受け取った」者が181名(8%)、「自分の性器を触らせたなり、なめさせるなどの行為(挿入なし)をして、お金を受け取った」者が129名(5.7%)、「男性の性器を触ったり、なめるなどの行為(挿入なし)をして、お金を受け取った」者が149名(6.6%)、「セックスをしてお金を受け取った」者が267名(11.8%)であった。

上記回答は、複数回答を認めているため、「同席や性行為をして、男性からお金を受け取った経験はない」者1,678名(74.1%)、「答えたくない」と回答した者84名(3.7%)、「食事やカラオケなどにつきあい」金銭を得た者を除く、321名(14.2%)が、何らかの性行為をして異性から金銭を受け取った経験を有していた。

なお、もっとも最近、性行為により金銭を受け取った時期は、「1ヶ月以内」の者が24名(7.5%)、「半年以内」が37名(11.5%)、「半年以上前(1年未満)」が21名(6.5%)、「1年以上前」が239名(74.5%)であった。

##### ②相手と知り合った手段

知り合った手段として、もっとも多かったのは「出会い系サイト」の利用で200名(62.3%)であった。次いで、「路上や飲食店などで、相手から声をかけられた(ナン

パ)」が84名(26.2%)、「テレクラ・伝言ダイヤルを通じて」が63名(19.6%)、「性風俗店での勤務時間以外での客との関係(連れ出し)」42名(13.1%)、「以前からの知り合い(友だち・知人)」40名(12.5%)を通じたものだった。

##### ③受け取った金額

なんらかの性行為をして受け取った金銭の額は、もっとも最近の経験において、「5千円以内」が31名(9.7%)、「5千円～1万円以内」が39名(12.1%)、「1万円～2万円以内」が75名(23.4%)、「2万円～3万円以内」が95名(29.6%)、「3万円以上」が81名(25.2%)であった。

##### ④事前に相手と確認する事項

もっとも最近、金銭を目的とし性行為を行った際、事前に相手と確認を行った内容として、最も多かったのは、「受け取る金額」の205名(63.9%)であった。以下、4割以上の者が確認していた項目として、「割り切った関係であること」168名(52.3%)、「セックスの時にコンドームを使うこと」156名(48.6%)、「自分がしたくない、あるいはしてほしくない行為(NG行為)について」154名48%、「相手がホテル代や個室代(カラオケルームなど)を出すこと」131名(40.8%)、「相手のケータイ番号」130名(40.5%)であった。

##### ④不快な経験

何らかの性行為をして金銭を受け取った経験のある者321名のうち、248名(77.3%)が、その際になんらかの不快な経験をしていたと回答した。もっとも多かったものは、「相手の容姿や性格がいやだった」114名(35.5%)であり、次いで「自分の中で背心的苦痛が残った」108名(33.6%)、「自分がしてほしくない性行為をされた・させられた」79名(24.6%)、「自分ではコンドームを使いたかったのに、使わずにセックスをした」74名(23.1%)、「事前に約束していたお金を払ってもらえなかった」73名(22.7%)、「妊娠したかもしれないと、心配した」66名(20.6%)、「セックスのあとに、性器のかゆみやおりもの(膣分泌液)の変化があった」65名(20.2%)があげられた。

## 6) 金銭の授受のない性行為の経験

金銭の授受のない性行為の経験について訊ねた。その経験率ともっとも最近、金銭の授受のないセックスをした時期、またセクシュアルヘルスに関連する不快な経験の有無についての回答結果は以下のとおりであった。

### ①金銭の授受のない性行為の経験

「お金を受け取っていないセックスは経験がない」と回答した者 85 名 (3.8%) をのぞく 2,179 名が「金銭の授受のない性行為」を経験していた。

また、そのうち、もっとも最近の経験時期は「1ヶ月以内」が 1362 名 (60.2%)、「半年以内」が 414 名 (18.3%)、「半年以上前 (1年未満)」が 120 名 (5.3%)、「1年以上前」が 283 名 (12.5%) であった。

### ②不快な経験

金銭の授受のない性行為において、何らかの不快な経験をした者は、2,179 名のうち、1,823 名 (83.7%) であった。もっとも多かったものは「妊娠したかもしれない、心配した」1,500 名 (68.8%) であり、次いで「セックスのあとに、性器のかゆみやおりもの (膈分泌液) の変化があった」662 名 (30.4%)、「自分ではコンドームを使いたかったのに、使わずにセックスをした」661 名 (30.3%) であった。

## 7) HIV 抗体検査、STD 検査の受検経験と対処行動

「HIV 抗体検査」を受けたことがある者は 20.5% であり、ない者は 76.7% であった。

「STD (エイズ以外の性感染症) の検査」を受けたことがある者は 36.3% であり、ない者は 60.6% であった。

「STD にかかった経験」については、「性感染症 (性病) にかかり、病院で治療をしたことがある」者が 20.5% であり、「性感染症 (性病) にかかったかもしれないと思ったが、放っておいたら症状が消えた」(7.1%)、「性感染症 (性病) にかかったかもしれないと思ったが、自分で治した」(5.4%) というように、STD 感染の危惧をした者は合わせると 12.5% であった。また、「性感染症 (性病) にかかったことはないと思う」者は 63.8% であった。

## 8) HIV や STD に関する知識

HIV や STD に関する知識を問う項目としては、木原 (2001) のうち、一般人の正答率が 60% 以下であった質問項目 10 項目に、ピルに関する質問 (同じく木原調査項目から) 1 項目を転用した。木原調査での設問では、「HIV (エイズ) やその他の性感染症 (性病) に関する以下の情報は正しいと思いますか。正しくないと思いますか。それぞれにあてはまるこたえを選んでください。『性感染症』とは、おもに性行為で感染する病気で、ここでは、エイズ以外の一般の性病を意味します。『口を使ったセックス』は、男性や女性の性器を口や舌で刺激する行為 (クニリングス、フェラチオ) を意味します。『性行為』には、フェラチオ、クニリングス、ペニスの挿入などが含まれます。」との教示が用いられており、回答は「正しい・正しくない・わからない」の三択であるが (木原, 2001)、本調査では、「正しいと思うもの」のみを選択する回答方式とした。

結果、木原調査で一般の正答率が 60% 以下だった 10 項目のうち、本調査の回答者の正答率が 60% 以下だった項目は 4 項目であり、そのほかはおおむね 7 割以上の正答率であった。もっとも正答率の高かったものは「ピル (経口避妊薬) をのむと、エイズやその他の性感染症 (性病) を予防することができる (※答えは「間違い」)」(91.4%)、ついで「性感染症 (性病) に感染すると必ず症状がでる (※間違い)」(88.0%)、「保健所では、名前を言わずに無料でエイズ検査ができる (※正しい)」(83.4%) であった。一方、正答率ももっとも低かったのは「性感染症 (性病) にかかっていると、HIV (エイズ) に感染しやすい (※正しい)」(33.5%) であった。「ヘルペスは、性行為で感染する (※正しい)」(54.5%)、「口を使ったセックスで、口から性器に性感染症 (性病) が感染する可能性がある (※正しい)」(57.1%) の項目も、ほかと比べて正答率が低かった。

## 9) 自由記述

全回答者の 1 割以上にあたる 474 件の自由記述回答が得られた。携帯電話からの文字入力であったにもかかわらず、長文の記述も多かった。

内容は、自身の体調への心配 (おりもの、性交痛など)、

性感染症・婦人科系疾患に関する知識のニーズ、性教育の必要性、金銭の授受のあるセックス経験の回想、本調査への感想（意義を認めるもの、疑問など）、性被害の経験に大別された。

#### 4. 考察

##### 1) 対象群（サンプル）の特徴について

本調査の対象者は、ポイント制の携帯電話 web アンケート調査会社に登録していた者であり、本調査の結果は青年期女性全体の行動傾向を示すものではない。対象者の特性として、携帯電話や web サービス等のツールや手段に関心があり、おそらく携帯電話の利用頻度の高い群であることが推測される。

また、スクリーニング調査時点で、本調査の趣旨と目的に同意した者のみが回答返信を行っているため、本調査のテーマにある程度の関心を有している者や、調査内容にかかわらずポイント獲得を主たる目的として参加した者とが混在していることが予測される。

このような対象者の偏り（バイアス）は存在するものの、本調査では、金銭の授受を介在する性行動と密接な関係があると考えられた携帯電話や web サイトの利用者に焦点をあてることを目的としており、本調査の回答者の特性は、対象選定のうえで意味のある偏りであると考えられる。

また、回答者の平均年齢は 22.7±2.78 歳であり、「学生」が全体の約 4 分の一を占めた。「アルバイト・パート」勤務者と「主婦（家事専業）」の者がそれぞれ 2 割と続いたことから、本調査の回答者の多くは、常勤職員のように程度の固定的な給与体系のなかで勤める者よりも、自由時間を多く有し、一定の収入を得られていない者が多いと考えられる。

対象者の学歴をみると、高等学校卒業が 28.5%（中学校卒業と高等学校中退を含めると 41.2%）であり、大学進学経験のある者は 26.1%であったことから、回答者は高卒および中卒の者がやや多くを占めており、同時に大学進学者の割合が約 3 割を示すという分布になった。ただし、調査時点での学歴であることから、生涯学歴とは異なることを付記しておく。

回答は全国から寄せられていたが、東京都、北海道、大阪府、神奈川県の高齢者の割合が高かった。都道府県内で

も地域格差が大きいため、その地域性は明らかではないものの、首都圏からの参加者が多いといえる。

##### 2) 日常生活におけるセクシュアルヘルスと健康全般等に対する意識や態度

約 6 割の者が実施していた保健行動としては、禁煙（62.9%）、月経周期の記録（59.8%）、禁酒・飲酒制限（57.3%）であり、比較項目の美容情報の収集（52.2%）よりも高い実施率であった。喫煙や飲酒の問題については意識が高く、また月経周期の把握にも努めていることが示された。

また、HIV や STD 予防行動に関する項目については、「おりもの（膣分泌液）の色やにおいを気にかけて見る・チェックする」（32.6%）と「セックスについての情報を探す・調べる」（28.1%）が、それぞれ 3 割程度の実施率であった。コンドーム購入・携帯行動については、「自分でコンドームを買う」（17.8%）、「ポーチやバッグにコンドームを常備する」（10.3%）であり、それぞれ 2 割、1 割程度であった。対象者である青年期女性にとって、コンドームの購入や常備携帯はまだ一般的な行動とはいえない現状が示された。

##### 3) 性娯楽産業等で勤務した経験

性娯楽産業等で勤務した過去の経験としては、「クラブやバーのコンパニオン」の勤務経験者が約 2 割と最も多く、セックスをしない勤務（6.6%）から、セックスをする勤務（デリヘル 6.8%、ソープランド 1.6%）へと、勤務経験率は低くなっていく。セックスを行わない業種への参入のほうが、セックスを行う業種よりも選択されやすいと考えられる。

調査時点での勤務率はいずれも、過去の経験率よりも低かった。調査時点で、セックスをする勤務に携わっていた者は、「デリヘル」20 名（3.5%）、「ソープランド」4 名（0.7%）であった。

##### 4) 金銭の授受を介した性行為の経験

何らかの性行為をして、男性から金銭を受け取った経験を有する者は 321 名（14.2%）であった。そのうち、「セックスをしてお金を受け取った」者は 267 名（全体の



11.8%)であった。

金銭を受け取った時期は、7割以上が「1年以上前」であった。「1ヶ月以内」(7.5%)、「半年以内」(11.5%)、「半年以上前(1年未満)」(6.5%)であった。このことから、対象者の多くは1年以上前の時期に金銭を受け取った性行動をとっており、このほかの項目への回答には回顧的データが多く含まれているといえる。

知り合った手段として、もっとも多かったのは「出会い系サイト」の利用(62.3%)であった。本調査対象者が携帯電話やwebサイト利用頻度が高い層であることから、出会い系サイトへのアクセシビリティは高い傾向があるのかもしれない。「路上や飲食店などで、相手から声をかけられた(ナンパ)」(26.2%)、「テレクラ・伝言ダイヤルを通じて」(19.6%)、「性風俗店での勤務時間以外での客との関係(連れ出し)」(13.1%)、「以前からの知り合い(友だち・知人)」(12.5%)がおもな手段としてあげられた。

なんらかの性行為をして受け取った金銭の額は、もっとも最近の経験において、「2万円～3万円以内」(29.6%)がもっとも多く、次いで「3万円以上」(25.2%)、「1万円～2万円」(23.4%)であったが、5千円など1万円以下の金額だった者も約2割おり、金額はまちまちであるといえる。行為によっても額が変わるであろうし、女性の年齢によっても異なるかもしれない。

事前に相手と確認を行った内容として、もっとも多かったのは、「受け取る金額」(63.9%)であった。また、「割り切った関係であること」(52.3%)といった関係性の確認についても半数以上が事前に確認すると回答した。さらに、「セックスの時にコンドームを使うこと」(48.6%)、「自分がしたくない、あるいはしてほしくない行為(NG行為)について」(48%)など、コンドームを条件にしたり、NG行為を事前に決めておくという者がそれぞれ半数近く存在した。

何らかの性行為をして金銭を受け取った経験のある者321名のうち、248名(77.3%)が、その際になんらかの不快な経験をしていた。もっとも多かったものは、「相手の容姿や性格がいやだった」(35.5%)であり、次いで「自分の中で精神的苦痛が残った」(33.6%)であったことから、性行為の内容というより、相手が好みではないことへの嫌悪感や行動後の精神的な苦痛が挙げられていた。

また、前出の質問項目で半数近くが事前確認を行っていた「NG行為」や「コンドーム使用」についても、実際には、してほしくない行為をされたり、コンドームを使わないセックスをしたりするといった経験をもつ者が2割以上いた。金銭の不払いや妊娠の心配、STD症状についても、それぞれ2割程度が経験していた。

#### 5) 金銭の授受のない性行為の経験

「金銭の授受のない性行為」は、回答者のうち96%が経験していた。最近のセックス経験時期は、「1ヶ月以内」が60.2%ともっとも多く、「半年以内」は18.3%であった。「1年以上前」は12.5%であり、全体的にみると比較的性行動が活発な層であると考えられる。

金銭の授受のない性行為において、何らかの不快な経験をしたことがある者は83.7%であり、金銭の授受を介した性行動における不快体験率(77.3%)よりも若干高い割合が示された。もっとも多かったものは「妊娠したかもしれないと、心配した」(68.8%)であり、次いで「セックスのあとに、性器のかゆみやおりもの(膣分泌液)の変化があった」(30.4%)、「自分ではコンドームを使いたかったのに、使わずにセックスをした」(30.3%)であった。金銭の授受を介する性行動と比べて、コンドームを使わないセックスが行われやすく、その結果としての妊娠の不安やSTD症状などが生じている可能性が考えられる。

#### 6) HIVに関する態度・知識について

HIV抗体検査の受検経験者は2割にとどまり、受検経験のない者が8割近くと多くを占めたことから、対象群にとって、HIV抗体検査はあまり馴染みのあるものではなかったり、検査に関する知識や情報が不足していたり、受検動機が十分に形成されていないことが示唆された。

STDの検査は受検経験者が4割弱であり、HIV抗体検査に比べると倍近くにのぼることから、対象群にとってはHIV抗体検査よりもSTD検査のほうが受けやすいと考えられていたり、症状への対処として検査の必要性があったりしたためかもしれない。

実際に、STDによる医療機関の受診経験のある者は、20.5%であり5人にひとりの割合であった。STD感染を危惧した者は12.5%であり、全体の3割以上の者がSTD

の感染もしくは感染懸念の経験があり、対象群にとって STD は比較的身近な問題と捉えられている可能性がある。

HIV や STD に関する知識については、木原 (2001) による一般人を対象とした調査と比べ、全体的に正答率が高く、正しい情報や知識を獲得できている者が少なくないことが明らかになった。とりわけ、ピルの服用が性感染症の予防にはならないことについては、91.4%と非常に高い正答率を示しており、回答者のピルへの関心の高さや青年期女性への情報伝達がなされている現状が推測された。しかしながら、性感染症のうちヘルペスの感染経路についての正答率は6割以下にとどまり、オーラルセックスによる口から性器への性感染症の感染経路についても、ほかと比べて正答率が低かったことから、STD についての情報・予防啓発をより充実させていく必要性があると考えられた。

#### 7) 自由記述から

474 件の自由記述回答からは、自身の体調への心配 (おりもの、性交痛など)、性感染症・婦人科系疾患に関する知識のニーズ、性教育の必要性、金銭の授受のあるセックス経験の回想、本調査への感想 (意義を認めるもの、疑問など)、性被害の経験に大別された。

調査に回答するなかで、HIV やセックスに関して考えることができたというポジティブなコメントが多く、具体的に、HIV 抗体検査や STD 検査の受検の動機が高まったという声も複数寄せられた。身体や性に関する不安や情報を求める記述も多かったことから、対象者にとって本研究のテーマに関わるトピックスは関心の高いところであり、情報や支援サービスのニーズも大きいことが推測された。

#### 8) 予防啓発的アプローチ

本調査では、HIV や STD の知識についての情報提供サイトを web 上に設置し、回答者は調査終了後に閲覧することができた。調査への協力を通じて、対象者への予防啓発の一助になりえたものと考えられる。

### 5. 自己評価

#### 1) 達成度について

青年期女子 2,264 名から、金銭が介在する性行動と金銭の授受を伴わない性行動の両方の状況下における保健行

動の実態に関するデータが得られたことは、本研究の目的である「性娯楽施設・産業と同じく金銭が介在する性行動をとりながら、産業形態に従事することなく、個人的に性行為によって金銭を得る状況に着目し、こうした状況下における女性の性行動の詳細と HIV や STD の感染リスクを含めたセクシュアルヘルス (性の健康) の問題を検討すること」を達成するのに十分な資料が得られたといえる。とくに、近年のモバイルツールの流行をふまえて、携帯電話の web を通じたアンケート手法を用いたことで、本研究のテーマに当該する対象群へのアプローチが可能になったと考える。

本研究の結果から、青年期女性の性行動を、従来のステディな相手とのセックス、もしくは CSW の業務上のセックスに限定することなく、それらの両方を体験しうるものとして、より広く捉えることができた。さらに、男性性器の挿入以外の性行為をしてお金を受け取った経験のある者を加えると、2,262 名の回答者のうち 14.2%にあたる 321 名は、これまでに何らかの性行為をして金銭を受け取ったことが明らかになった。こうした青年期女性の性行動の現状と、そこでのセクシュアルヘルスのリスクを検討できたことは、今年度の大きな成果であった。

#### 2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

本研究が注目した「性娯楽施設に勤務する以外の状況における金銭が介在する性行為」に関する大規模な調査は、わが国では初めて行われたものであり、回答者のうち約7分の1の女性が該当経験を有するという結果は、今後の HIV および STD 感染予防の教育や有効な施策を検討するうえで役立つ情報となりうる。ひきつづき、対象者の年齢や社会的背景をふまえた分析を行うことで、国際的・社会的意義もより高められると考える。

#### 3) 今後の展望について

本調査では、web アンケートを用いた量的調査により、青年期女性の性行動についての傾向を把握した。今後は、本調査により示された結果について、女性自身がどのような意識や認識を持ち、行動を選択しているのかについてより詳細な検討を行うために、インタビューなどの質的調査を行うことを予定している。

## 6. 結論

携帯電話 web アンケートにより、18 歳から 29 歳の女性 2,264 名（平均年齢  $22.7 \pm 2.78$  歳）から、金銭が介在する性行動と金銭の授受を伴わない性行動の両方の状況下における保健行動の実態を把握した。

対象者の 11.8%が性娯楽施設に勤務する以外の状況において、「セックスをしてお金を受け取った」経験があり、挿入行為以外を含む何らかの性行為によって金銭を受け取った経験をもつ者は 14.2%であった。相手と知り合う手段としてもっとも多かったものは、「出会い系サイト」の利用であり、事前に、金額は関係性について確認しておく者が半数以上であった。また、事前に「セックスの時にコンドームを使うこと」を確認した者が 48.6%いた。しかし、実際には、性行為の際に不快な経験をもった者が 77.3%おり、「コンドームを使わないセックスをした」者も 2 割程度存在した。しかしながら、金銭の授受のない性行為においても、回答者のうち 83.7%が不快体験を経験しており、なかでも「妊娠したかもしれないと、心配したこと」の経験がもっとも多かった。金銭の授受のない性行

為においては、「コンドームを使わないセックス」の割合も高く、セクシュアルヘルスの問題が示された。

HIV や STD に関する知識は、一般人を対象とした先行研究と比べて正答率が高く、個人が有する情報量は少ないと考えられるが、自由記述では STD やセックスについて具体的な情報を求める声が多く寄せられた。また、調査への参加により、性やセクシュアルヘルスに対する関心が高まったり、HIV 抗体検査や STD 検査への受検への動機が高まったというコメントも得られたことから、調査実施が教育・啓発的な役割の一助となったと考えられる。

金銭の授受の有無や相手との関係性などによる違いはあるものの、いずれの場合も女性にとってはセクシュアルヘルスのリスクが存在し、今後、さまざまな状況の違いに応じた課題を明らかにし、有効な支援・予防啓発につなげていくことが必要である。

## 7. 知的所有権の出願・取得状況（予定を含む）

特記事項はなし。

## 研究発表

### 分担研究者

#### 野坂祐子

- 1) 野坂祐子、内海千種. 青少年の性行動と STD/STI 予防行動についてーセクシュアル・ヘルスの観点からー. 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学 第56巻 第2号, 117-127, 2008.
- 2) 野坂祐子. フィールドワークにおけるジェンダーージェンダーをともに生きる<当事者>としてー. 宮内洋、今尾真弓編. あなたは当事者ではないー<当事者>をめぐる質的心理学研究ー. 134-144.北大路書房：京都. 2007.
- 3) 野坂祐子. 学校危機とソーシャルサポート. 水野治久、谷口弘一、福岡欣治、古宮昇編. カウンセリングとソーシャルサポート つながり支えあう心理学. 75-86. ナカニシヤ出版：京都. 2007.
- 4) 野坂祐子. 保健行動とメンタルヘルス. LET' S CONDOMing No.1 テキストブックーSexual Healthをすすめるためにー. 16-19. 特定非営利活動法人ふれいす東京. 2007.
- 5) 野坂祐子. グループワークの円滑な運営について LET' S CONDOMing No.2 ファシリテーター用ガイドー授業を円滑にすすめるためにー. 19-33. 特定非営利活動法人ふれいす東京. 2007.
- 6) 野坂祐子 (共著) LET' S CONDOMing No.3 ワークブックー授業プランの組立てー. 特定非営利活動法人ふれいす東京. 2007.
- 7) 野坂祐子 (共著) LET' S CONDOMing No.4 シナリオブックードラマの流れとポイント解説ー. 特定非営利活動法人ふれいす東京. 2007.